

キラリ★ 話題の「ひと」



國分 三郎 さん
(植上町)

○プロフィール
佐野日本大学短期大学非常勤講師
國分論語塾塾長
日本経営学会などに所属。企業財務、経営理念、長寿企業分野を研究し、講師として活躍

いま、子どもたちに送るメッセージ

國分さんは銀行マンから大学の教員に転身しました。以前は東京の大学に勤めていたのですが、平成2年に佐野女子短期大学（現佐野日本大学短期大学）に移り、家族とともに佐野に越して来ました。國分さんは会社の経営を研究していますが、中国の歴史にも関心があり、『水滸伝』や『菜根譚』などを愛読していたそうです。太田市の「中齋塾フォーラム」で陽明学を学び、深澤中齋師と出会ってからは、師の指導の下で本格的に論語を学びました。

12年前に若手の経営者の方々と、ビジネスや生活の中に論語の教えを活かすために『國分論語塾』を立ち上げ、20名の塾生さんと一緒に日々研鑽しています。最近では、子どもの論語教育に力を入れて『ここを育てる母子の論語教室』を開きました。この教室は「素読」が中心で、子どもたちは言葉の意味を知らないままに、大きな声で論語を読んでいきます。國分さんは「言葉の意味が分からなくとも、素読によって言葉は自然と頭に入ります。そして、

論語の美しい響きとリズムは崇高な人間性を覚醒させます」と素読の効用を力説します。現在は、山形小、佐野小をはじめ市内の5つの小学校でも子ども論語を指導しています。

「論語には珠玉の言葉が散りばめられています。是非、論語の言葉を感じて欲しい。長い人生には、苦しいときがあります。この様なときに論語の言葉は、一条の光を伴って生きる力を与えてくれます。また、論語と併せて中根東里や小曾根俊子といった佐野の人物や伝統行事を知って欲しい。そして、郷土に誇りを持って欲しい。これは国際社会では大切なことです。」と子どもたちに熱いメッセージを送ります。

(市民記者 永倉文子)



國分さんによる講演の様子

市長からの メッセージ



木々の緑も色濃くなる中、市内各地では、春祭りやスポーツイベントなどが行われ、県内外からも多くの方々が本市を訪れて来ています。

特に4月から6月末までは、JR東日本と県内各地域が協働で開催するデスティネーションキャンペーン「本物の出会い 栃木」の期間中であり、県内各地で大規模な観光キャンペーンが実施されています。

佐野市では「ドラマチックシティ佐野」と銘打ち、先月、お披露目した佐野駅前「天明鑄物の「さのまる像」とともにおもてなしの心でお客様をお迎えしたいと思っています。

また、期間限定の特別公開として、国指定の重要文化財である佐野市吉澤記念美術館の伊藤若冲「菜蟲譜」や佐野市郷土博物館の天明鑄物の「鑄銅梅竹文透釣燈籠」をはじめ、人間国宝 田村耕一氏の陶芸企画展や国指定史跡の唐沢山城跡など、本市の様々な観光資源を積極的にPRし、このチャンスを活用したいと思っています。

3月24日には佐野市を愛するパパたちによる地域創生事業「佐野パパプロジェクト」として、駅前交流広場で「佐野カラageフェス」が開催されました。家族連れや小中学生など約3500人が長蛇の列を作り、改めて「唐揚げ」の人気の高さに驚きました。今回、市民主体のイベントが大成功であったことは、本市の市民力の向上を裏付けるもので、私も大変嬉しく、また心強く感じています。

今後、本市がシティープロモーションを推進していく上で、今回の「パパプロジェクト」を成功例として、多くの皆さんと一緒に佐野市を盛り上げて行きたいと考えていますので、皆さんのご協力とご参加をお願いします。

岡部正英



華麗なる佐野クリケットフェスティバル

3月17日・18日の2日間、佐野市運動公園陸上競技場で開催されました。

日本でなじみの薄いクリケットですが… 世界での競技人口はサッカーに次ぐ2位といわれています。

イベント当日は、南アジアの選手たちとの交流マッチが実況解説付きで行われ、クリケットを初めて見るという人も、ルールや得点方法などに耳を傾けながら、試合観戦を楽しんでいました。

また、実際にクリケットを体験できるブースもあり、クリケット的当てゲームなど、クリケットを存分に楽しめる内容が盛りだくさんでした。

会場ではカレーフェスも同時開催され、南アジア各国のカレーや、佐野らーめん・いもフライとカレーのコラボメニューなど、イベント限定のグルメも出展し、多くの来場者で賑わいました。



インドイレブンVSジャパイレブンの試合の様子



クリケット体験



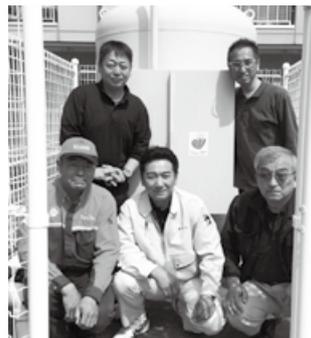
大勢の人で賑わうカレーフェス

LPガス「さのまるステッカー」でPR

佐野市エルピーガス販売協同組合が「さのまる郷土愛マーク」を使用したステッカーを作成しました。

ステッカーをとおして佐野への郷土愛を広めるとともに、ボンベ、店頭、配達用の車両等に貼付することで、LPガスが、災害時のライフライン再建に素早く対応できることを、市民の皆さんに周知していきます。

(市民記者 中里聖子)



佐野市エルピーガス販売協同組合の皆さん



作成したステッカー

佐野弁
ばんてい

かつて家の出入り口をクグリ
と叫んだ

門のわきにある小さな戸口を、共通語で「ぐぐり」といいます。ところが、農村地域では、家の出入り口(玄関)を、一般にクグリといっていました。ほかにヘーリックチ・ヒヤリックチなどともいいました。ヘーリックチとかヒヤリックチは、「入(はい)り口」の変化語です。クグリは、身をかめくぐって出入りする「小さな入り口」をいいます。クグリの高さは1メートル50センチ、横幅は1メートルほどで、このクグリは大戸に付いています。

クグリには引き戸が付いているので、いつでも開閉し、出入できるようなっています。大戸は、屋内にある馬屋から馬を引き出したり、引き入れたるときに使用しました。

「クグリは、セメー(狭い)から身をかがめてヒヤーンネ(入らない)と、頭をぶつつけてイタクスツカン(けがをするからね)」

昭和30年代になると、多くの農家で家を改修し、あるいは建て替えるようになりました。昔からのなじみのクグリは、かげも形もなくなってしまいました。クグリということばもなくなり、死語となってしまいました。

ヒヤリックチ・クグリ以外に、トブグチとかトボグチという古い方言もあります。これらの方言は、戸袋口が変化したもので、もとは引き戸をしまう所を備えた入り口という意味でした。上記の方言は、いずれも物の形や構造や大きさなどと、深くかかわり合っていることがわかりますね。

(市民記者 森下喜二)

今回の表紙 「根古屋森林公園の鯉のぼり」(飛駒町) 平成30年4月10日撮影